研究ノート

沖永良部島（鹿児島県）の移住（希望）者に関する記録

錢夢卿、長谷川秀樹

はじめに

本稿は「離島地域における社会変容の特殊性」について考察するため、奄美群島の一離島である鹿児島県沖永良部島（おきのえらぶしま）にて2022年10月に実施した、移住者あるいは移住希望者についての対話参与型観察およびインタビュー記録である。前半の記録は錢夢卿によるもので、22日、同島東部の大島郡和泊町（わどまりちょう）にてオンライン及び対面にて開催された、移住者とこれからの移住希望者との対談「えらぶぐらし」に参加した結果をまとめた対談参与型の記録である。後半は長谷川によるもので、同月20日、同島西部の知名町（ちなちょう）にて「地域おこし協力隊」として活動する2名にインタビューした内容をまとめたものである。本稿は「研究ノート」であり、紙面の都合もあるため、分析考察等は行わず、記録という形でとどめることとした。

I.　「えらぶぐらし」参加
―― 対談参与型による移住者・移住希望者の言説

「えらぶぐらし」とは知名町役場が主催する同町への移住者のため疑問に答え、対談するために年1度開催される自由対談形式での対面およびオンライン形式のハイブリッド型交流会である。オンラ

インでイベントに参加して移住の相談に来たのは5人で、島からは移住経験者や地元の人、役場の人計10人以上がオフラインで参加した。対談は3時間にわたって行われ、主にオンラインで移住相談をした人が質問し、オフラインで移住経験者が回答するという複数の人が一緒に交流する形で行われた。年齢は直接質問せず、錢の判断による。以下に対談の内容について記す。

A　女性（30代）、実家および在住地（対談時）は福岡。彼氏は沖永良部島の出身であり、2023年に結婚し、島に移住する予定。移住後の仕事として保育士が可能かどうか質問。関連する仕事も含め就職機会に関心がある。また島の子どもたちの教育レベルについても尋ねたい。

B　女性（20代）で、彼氏と一緒に11月に移住予定。仕事に関連した質問「島で新しいことを見つけているのか、なぜ移住する人が多いのかを聞きたい」。

C　男性（30代）、対談の10年前に島に移住し、北海道出身。対談時点では島で事業を起こし、多岐にわたる仕事に従事。自らハンバーガーショップ、居酒屋、美容室を経営し、またホテル経営も委ねられていた。仕事のことを独自に考えていたが、ふと面白いアイデアが浮かび、顧客の意見を聞くこともあった。基本的には何年もの間、企画を練ってから実行していた。「島内で店舗を開くには、現実的な問題として資金の問題がある。私が島に来た時、創業資金は2万円しかなかった。商店経営者に信用を得られる場所に行って資金援助を受ける必要があった。ずっと明確な計画がなく、自分がいつ何をすればいいのかわからないと、資金を借りるのは難しい。ネットでの店舗ならまだしも、実際の店舗を持つと賃料などの問題が絡んだり、リスクが高くなったりすることを考えると、最低でも3年、長くても10年のプランをスポンサーに提示することが不可欠。でも私の場合、借金しないと、逆に仕事をサボってしまうかもしれな

い」。

A　何をしているのかわからない、ビジネスは難しいと感じていた。以前はネイリストの仕事をしていたが、今はしていない。できれば島でネイリストをやりたいと思っていたが、他人からお金をもらって経営した経験がない。

C　「現在〔対談時点 —— 筆者注〕も美容室でネイリストを新たに1人雇用している。今島では、人気のあるビジネスは、個人的に自宅でネイル業やコーヒーショップ、飲食業を営むことだが、近年突然流行り出したわけではない。また、ネットでのビジネスを行う移住者や、工芸品を作成しネットで販売する人もいる。稼ぎ方は様々だ。例えば、ネイルを手がけて稼ぐのであれば、実店舗を持たない方が楽だ。実店舗を持つと逆にリスクは高くなり、家賃や敷金なども発生する。週末は自宅でネイリストの仕事をしてもいいと思うが、残りの時間は別の場所で仕事をする方がリスクは少ないと思う」。

D　女性(30代)、神奈川県出身、趣味は各地の花火大会を見に行くことで、沖永良部島にはまだ来たことがなく、どんな様子なのか知りたかった。また、島での生活スタイルや、どのくらいの資金を貯めて島に移住できるのか、移住後に苦労したことや良かったことなどを知りたかった。移住者が現在どのような仕事に就いているのかも知りたい。

E　男性(40代)、さまざまな仕事に就いてきた。大きく2つある。1つは最近の新聞記者、フリーライターである。紙媒体の新聞の記者やネット記事を執筆したりとか、半分はボランティアのような感じで、比較的少ない報酬で、自宅で稼ぎための仕事ではなく、地域との繋がりを作るみたいな感じでやっている。フリーライターは、先ほどCがインターネット関連の仕事を話していたように、東京のサ

イトを運営している会社に原稿を書いたり、島に住んでいない人の記事を編集して原稿を渡し、この方式で原稿料を得る。もう1つの仕事は起業中で、今は必死に準備している段階だ。実は島には外国人が多く、およそ150人、島の人口の1.45%ほどを占めている。しかし、彼らは日本語がまだあまり上手とは言えないし、日本人との交流もあまりない。だから場所を作り、報酬を得るために何らかの支援を提供しようと考えている。

F　男性（20–30代）、対話時点の2年半前に移住（2020年4月）。ライフスタイルは、海が大好きで、仕事は子供関係、夕飯の提供の仕事もしていて、夜8時の勤務がよくある。そうすると3時間くらい休みがあるけど、そういう時はいつも海に行っている。お金のことについては、きっとこっちに就職してくるから、その時は何も考えず、心配することもなく移住した。周りとの関係は、やはり島なのでコミュニティが小さい。夜買い物に行くと、絶対に知り合いに会う。いろいろなことをいちいち話していたら、ほかのことはできないので、簡単な挨拶である。結局、島の全員が自分が何をするか知っている。今は何の心配もなく生活している。苦労することはなく、今ではアマゾンのように便利だ。しかし約2年半前に移住したとき、ちょうどコロナ禍だった。その時は島から出られなくて、買い物ができなくて、その時はやっぱり苦労したけど、今はもう全然大丈夫。ここは海がきれいなので、仕事が終わってから夏の間は毎日のように海に遊びに行ける。

G　男性（40代）。移住して対談時点と4年になった。友人が先に島に移住してきたので、仕事も家も決まっていない時に来った。不動産屋がなかったので、当時は家を探すのに苦労した記憶があった。最初に住んだアパートはとてもボロボロで、そこに住んでいた頃からずっと一軒家を探していた。その後、今の家に近い家に住み、2年半借りて、会議時点はリフォーム倉庫に住んでいた。家賃は非常に安く、広い庭もあり、3匹の犬とヤギがいる。島の電気屋は少し高く

て、最初は大型家電を買うのに金がかかったが、島の人たちと親しくなると、例えば使い古した冷蔵庫を持ってきてくれる人がいたり、古い電気製品をどんどん家に持ってきてくれたりして、島のような生活の最初の1年を過ごした。移り住んだときの引っ越しで貯金を一気に使い果たしてしまい、例えばエアコン1台に10～15万かかる。引っ越した家にエアコンがついているならまだしも、都会ではエアコンがついている家が一般的である。しかし意外にも島の空き家にはエアコンがほとんどない。

H　男性（40代）。横浜出身、品川在住。10月初め（2022年）に〔奄美〕大島を訪れ、島の人たちと話をしていたので、彼らに誘われてこの会議に参加した。農業が好きなので、例えば花に関する趣味があるので、もし移住したら、それに関する相談をしたいと話した。他にも島での一日がどんな様子なのか聞きたい。

I　男性（30代）、神戸出身。対談時点1年前（2021年）に島に移住。同時点では花の農家と協同組合の仕事をしていた。自分でお弁当を持っていくので、車でご飯を食べに行くことはないし、畑の仕事をしているので、商店やレストランからは離れている。仕事をしていると田畑会社の人が車で迎えに来てくれた。この島は潮風が強く、良い車を運転してもすぐに錆びてしまうため、普通の車を選ぶのが一般的である。また家の中も潮風の影響を受ける。

J　男性（30代）、横浜出身。対談時点1ヶ月前（9月）に移住。、現在はIと同じ仕事をしている。車は18万円で買った。

K　男性（年代不詳）、レンタカー関連事業に携わる会社の社長。「車の問題についてはいろいろな解決方法があるので、もし住み替えが必要なら私に相談してください」と話していた。

L　女性（20-30代）。〔2022年〕7月に一度来島、対談時点10月に

移住したばかりである。ここの人たちはとても親切で、自然が美しいのでここに来て暮らすことにした。今のところ仕事は決まっていない。最初は、「島暮らし体験住宅」を和泊町に申し込んだが、応募者が多すぎてチャンスがなかった。その後、「くらすわどまり」のホームページに移住者のためのシェアハウスがあるのを見た。前はシェアハウスを考えたことはなかったが、自分1人で移住したので、他の人と一緒に住めば交流もできるし、一緒にお酒を飲むこともできるので、会議時点はそこに住んでいた。車については、島で知り合った人の親戚がレンタカー関係の仕事をしていた。26万円の借金で1年半の返済を約束して車を買った。周りの人と仲がいいので、安くしてもらえてありがたいと感じている。島での生活は毎日のように楽しかった。もともと3年間大阪に住んでいたが、大阪の友達もたくさんいるが、こちらの人間関係はもっと深くなると感じていた。ここの人はとても親切だと感じて、彼女も同じように返したいと思っていた。

B　彼氏はハチミツ作りに関わる仕事をしたいと思っていたが、島に養蜂場はあるか、自身はキャンドルが好きで、ハチミツを使ったキャンドル作りのような仕事もしたいが、島の気候はミツバチを飼うのに適しているのだろうか。

L　今住んでいるシェアハウスの管理人はマンゴーに関する仕事をしていて、養蜂場のようにミツバチを借りて受粉したり、ハチミツを作ったりしていたが、具体的にはよくわからない。島には蜜蠟の副産物を作る人がいる、蜜蠟は天然顔料と混ぜてクレヨンを作ったり、特産のじゃがいものでんぷんを混ぜて粘土を作ったりと使い道もいろいろある。島には関係のある仕事をしている女性がいて、いろいろなことを詳しく話すことができる。

和泊町移住相談課係女性　まずは島に島体験住宅がある、そこに泊まったら短期で1カ月、長期で3カ月という人もいる。住んでいる間

に島にどんな虫がいるのか、台風シーズンにはどうなっているのか、スーパーで食料が不足しているときはどの程度なのかを体感することができる。地元の人とも交流を取ることができ、島の生活が自分に合っていると思えば移住する人も多い。

知名町移住相談課係男性　知名町では空き屋の利用が和泊町に比べてまだ充実していないところが多いが、来年度の計画に関連して予算を見積もり、住宅を使ってみようと考えている。具体的な空き家に関する情報は、知名町のホームページで確認することができる。また住み替えて新築しようとすると町内に7カ所あり、最長3年間入居が可能である。現在提供されている空き家の賃料は初年度5,000円、2年目2万、3年目3万というように徐々に上がってきていえる。最初はお金がかかるところが多いかもしれないが、代々3年かけて完全に生活に馴染むことができる。最終的な家賃賃料は4〜5万程度で、5,000円からの賃料という形で徐々に上昇していく。今空き家を借りると役場から2万の補助金が支給されることがある。

D　　沖永良部島で、一番の観光スポットはどこ？

観光課職員　一番人気のアクティビティはケービングという洞窟探検が人気。ダイビングはもちろん、同島は最高地点でも240メートルしかないので、サイクリングも徐々に増えてきている印象がある。

筆者（銭）　移住した人と地元の人の関係は良好か？　地元の人と関わりのため何が必要と考えるか？

I　　住んでいる地域、「字（アザ）」という小集落で、共同製造があったり、字単位で親世代も一緒に運動会に参加するが、人が足りないので、年代別のリレー協議では、自身は走らないが、知り合いの家族が参加したり見学に来たりする。でも呼ばれることはよくある。島では年末にマラソンのようなイベントがあり、移住者にも参加して

もらっているので、自分から進んでいけば交流しやすいと思う。最初のうちは確かにこういったイベントには呼ばれないなどの壁があるが、朝に会って声をかけるような小さなことから、徐々に溶け込んでいく。自分は移住者側なので、周りに溶け込むためには自分からコミュニケーションを取ることが必要だ。

島の地元の人　移住した人や内地から来た人に年齢を聞くとき、「いくつ」ではなく「何年生」を使う。学年の繋がりはすごく大事にしていて、生まれ同士と呼びあう。もし移住者も同じ年で生まれだとしたら、「じゃ一緒に飲もう」とか、そういう学年の繋がりがすごく強いので、都会とかというと「なになに先輩」「なになにさん」と、でも島の方々で必ず「なになに兄ちゃん」で、「なになにさん」とかほぼほぼ言わない。地域は元々小さいなコミュニティで、すごく繋がりが強い関係で、移住者が一歩入ってしまえば、地元の方と繋がりが極めて強くなる。

II.「地域おこし協力隊」2名に対するインタビュー記録

長谷川は知名町の「地域おこし協力隊」として活動している2名に、同町内にある「フローラルホテル」にて2人同時形式インタビューを行った。質問項目はあらかじめ用意したものとインタビュー時に内容に即して長谷川が思いついた項目からなる半構造化形式のものである。対象者はMとNの2名でMは20歳代後半の女性、Nは同年代(Mよりは若干年少)の男性。まず、Mについて、生い立ちと「協力隊」応募への経緯については以下のように語る。

「川崎に生まれ6歳まで過ごしたが、両親が転勤族のためその後、京都に引越し、高校卒業まで過ごす。大学はN女子大学に進学したが、諸事情あって退学し、以降、芸術に関心を持ったことから、K造形芸術大学に身を置きながら、約2年間パリで遊学する。(…)しかし、N女子大学での復学意欲がわき、3年次に編入学し、2020年春に卒業した。

N大の編入学以降、奄美群島、特にその歴史や文化に関してある関心をいだいたことが、知名町に来るきっかけとなった。T大学O教授のパスカル・キニャール特論講義のレポート課題で、奄美の伝承とキニャール作品群の関連について述べたのだが、羽衣伝承などヨーロッパにも似たような物語構造があると感じてとても興味が湧いた。また奄美群島の中でも沖永良部島には「島建てシンゴ」というユタの唱えがあり、その物語に感銘を受けた。卒業する前の2019年に初めて奄美大島を訪れ、この時になるべく長くこの地域にいたいと感じるようになった。

地域おこし協力隊の存在については、以前から名前は聞いていたことはあったが、奄美を訪れるころからその存在や活動に関心を抱くようになった。何のつながりもない若者が地方、特に離島や過疎地に移住し、そこでの暮らしを実現するためには、地域おこし協力隊員になることが一番確実な手段と考えたからだ。ただ、過疎地や離島が抱える幾つかの問題、少子高齢化や空き家問題など、そうした問題の解決に取り組んでみたいという気持ちもあった。そこで、知名町役場に思い切って問い合わせたところ、たまたま住居が空いている、さらに地域おこし協力隊員も探しているので、移住するのなら隊員になって協力してほしいと依頼され、それで決めた。

都市生活に対する疑問もあった。ただそれからの逃避、という訳でもない。沖永良部島に来てみて感じたことは、この島はある意味「都会的」「都市的」なのかもしれない。もちろん移動に自動車は必要であるが、この島は何と言うかコンパクトシティに近いのではないかと思っている。島内では不便さはそれほど感じていない。いま1歳の娘を育てているが、育児面でも幸い心理的負担はそれほど感じていない。島の周囲の人たち（子どもと私を）見てくれているからだ。都会だと隣近所の人がこの島の人のように見てくれるということはおそらくないだろう。都市的生活に対する疑問が要因の一つであるが、この島に来てみて田舎とか不便さ、というよりも、コンパクトシティとか子どもを見てくれるとか言ったもう一つの別の都会的側面を感じている」。

協力隊としての活動内容について、Mは以下のように語る。

「1年目〔2020年春着任 —— 筆者注〕は知名町広報誌の編集のほか、寄贈図書の扱いがあった。寄贈図書とは、沖永良部島にゆかりがあるある島外在住者から、東京のとある大学の教授だった親の遺品として町に膨大な蔵書が贈られた。しかし、あまりにも膨大な蔵書数で、置く場所がなく町で処分されてしまいそうになった。何とか本だけは保管して欲しいと町の図書館に架電したところ、同町公民館に勤務するP〔60代男性、同町教育委員でもある—筆者注〕が応対した。話を聞けばPも同じ意見だということがわかり、貴重本の仕分け作業などを一緒に大急ぎで行った。以降もPとはいろいろ話す機会があったが、彼は奄美の歴史や文化について広く深く知っており、それらに関する話を聞くことで、町職員として働く自分にとってもありがたい存在だと思っている。

着任当初は、空家の管理やIターン移住者に対する住居探しの手伝いや案内といった他の離島などに見られる協力隊のような活動、役場外の地域社会に直接コミットできる活動や事業に取り組みたかった。

いま〔2022年時点 —— 筆者注〕の活動の中心は「ふるさと納税」関連で、特に返礼品の開発について役場で業務を行なっている。その範囲で、返礼品の生産者など役所外の人との交流や接触はあるが、Nに比べると間接的なものにとどまる。協力隊の本来の趣旨とは異なる業務なのかもしれないが、地方自治体の中で多くのことを学ぶことができている。寄付者であるが、この島や知名町と全く縁のない人が多く、ほとんどは、この島や知名町だから、ということよりも返礼品が目的でここを寄付先として選んでくれている。一方、何らかの形でこの島と関わりのある寄付者は事業主などが多く、知名町を支援したい思いから寄付金も大口となっている。〔返礼品開発という仕事に関してふるさと寄付金制度の理念から見て矛盾を感じないか？　という質問に対して —— 筆者注〕確かに、寄付という行為の本旨を、意味を忘却しているのではないか、と感じることはある。ふるさと納税の寄付という

行為の本旨は、あくまでも寄付、ということなのではないか。だから、たとえばこの町のこの年の寄付金総額は、あの町に比べて少ない。知名町は奄美で一番少ない、といった指摘も受けるが、１円でもこの町への寄付者がいるのだ、ということを忘れてはならない」。

普段の生活や島外への移動の有無などについては、Mは以下のように述べる。

「仕事で島外に出ることは少ないし、コロナ禍で今はほとんどない。鹿児島県庁〔鹿児島市内にあり、沖永良部からは飛行機か船に乗る必要がある――筆者注〕に対してはふるさと納税の寄付金額の報告を行うが、そのために島を離れるということは少ない。逆に、プライベートで島から出ることの方が多い。いま娘と２人でこの島に住んでいるため、家族〔フランス国籍の夫、Mの両親等――筆者注〕に会いに京都や奈良に出かけるということはある。旅行ももちろんしてみたい。奄美の他の島々はもちろん見てみたいけど、山や中山間村も好きで、農村・山の暮らしも体験したいと思う。長野とか山梨あたり。

SNSはあまり使用しない。今育児中だから。Nの方が多用しているのではないか？　チャットなら、家族や友人とすることはよくある。協力隊の任期は３年で来年〔2023年――筆者注〕の３月に満了するが、産休・育休をとったため、1年延長している」。

地元生まれの島民はIターンとしてやってきた人たちをどう見ているのか？　問いについては、Nに同意見であるため、Nのインタビューを参照されたい。

続けて同じく同町の地域おこし協力隊員Nである。NはMと同じ2020年４月から協力隊員として同町に赴任している。Mは同町役場企画課付職員であるが、Nは同町の教育委員会付職員である。Mに同じく生い立ちや沖永良部島来島の経緯について尋ねると、以下の応答があった。

「生まれたのは宮崎で、その後、両親の実家でもある熊本でも暮ら

し、その後、大学卒業するまで鹿児島にいた。海外留学や生活の経験はあるが、国内では南九州の3県に範囲はとどまっている。大学では教員養成課程に在籍していた。鹿児島県は多数離島を抱えていることから、教員養成においても離島とのつながりを重視していて、特に小学校教諭については離島に一定期間赴任となっているため、大学の初めのころから離島の存在は意識していた。その中で沖永良部島は大学時代に訪れた島の一つである。

その後、フィンランド留学や日本語教育に関わるなどして、大学自体は5年かけて卒業(2018年9月)し、もともと関心があった離島での教育活動に携わりたいと思い、沖永良部でのフリースクールづくりなどに関わってきた。

そうした最中に地域おこし協力隊の募集があることを知り、2020年4月から教育委員会にて活動している。現在の活動であるが、過去の新聞記事などで「英語教育」が重視されていたように思うが、実際は離島留学制度と、児童生徒の居場所というか、サードプレイスづくりに主に取り組んできた。もちろん、当初の希望だった英語についても、島内のイングリッシュキャンプで使用される教材に、沖永良部島に関わる生物多様性や海洋ごみ問題について英語で作成するなどの活動は行ってきた。だが、離島留学制度を一から立ち上げたことにはよりやりがいを感じている。ただこれは教育活動というよりは、それを支援する活動という感じだ。というのは、離島留学制度設けること自体はそれほど大変ではないが、これに応募してきた親子が住む場所を探すことの方がより大変だ。

単に空き家を探し出して留学してきた親子に提供するだけでは、他島の離島留学と何ら変わらない。どういう留学なら沖永良部らしさを出せるかで苦心している。そのため、「コミュニティ形成」に繋がる空家の活用について模索し、その結果、空き家をシェアハウスとして、地域コミュニティの新たな拠点、そしてとくに子供の居場所という観点からのサードプレイス機能を持たせた空間形成を目的とする場所の創出にとりくんできた。昨年〔2021年――筆者注〕からこのような観点での離島留学制度が始まり、3組の親子が参加してい

る。親子ともに沖永良部島を好きになって欲しいし、またよければ移住して欲しいとも思う。

〔日本国内の離島や山村の留学制度は、地元の家庭が都会から児童や生徒を受け入れて面倒を見るというイメージを持っているが、そうではないのか？　という筆者の質問に対し〕今では日本のどこも、子どもだけを地元家庭が受け入れることはしていないのではないか？　地元の受け入れ可能なホームステイ家庭が高齢化などで少なくなったことや、留学中に子どもが病気に罹ったり、けがや事故にあった際の責任の所在が最大の問題で、このことから一時期、受け入れ家庭も自治体も離島留学制度に及び腰になった。そうした問題を解決するには、子どもを親元から引き離して地元家庭で受け入れるのではなく、家族まるごと、あるいは母子が島に移り、自分たちで生活を営んでもらう形が主流だ。だから離島留学制度の課題は、そうした責任の問題から今では住居空間の確保に移行しており、移住Iターンが抱える問題と共通項と言えるかもしれない。〔留学したいというのは子どもの側からなのか、それとも親の勧めなのか？　という筆者の質問に対し〕母親が海や離島や自然が好きで、そこでの生活を体験してみたいから、というのが応募動機で比較的多く思えるが、概して言えることでもない」。

沖永良部島へのIターン者と地元島民との関係については、以下のように述べている。この見解はMもNも同じである。

「関係は良好だし、協力隊や教育委員としての仕事上での信頼は築けたと思う。自分の仕事は前任協力隊員の事業の引き継ぎなので、前任者の積み上げてきた信頼が基礎にある。そういう意味で全く新しい事業を担当しているMは大変だと思う。地元の人たちは確かに受け入れてくれてはいるし、そのことには感謝している。ただ、『島生まれじゃない』という意識というか感覚はある。やはり島に生まれ、幼い時から付き合いのある地元生まれの島民どうしの関係は、大人になってから移住してきた者には理解しにくい深い関係で結ばれている。垣根とか障壁というわけではないが、そうした『違い』は感じざるをえない」。

仕事やプライベートで島外に出ることは多いのか、という問いに対しては、「あまりない。温泉が好きなので、島というよりは温泉に浸かれるところに旅行したい」とのことであった。

（せん・むきょう　都市イノベーション学府修士課程）
（はせがわ・ひでき　都市イノベーション研究院・教授）